

N o g a t a

2022、12、20

直方ミニバスケットボールクラブだより

共育コラム

コロナ禍で失われているものがあることの認識に立って

試合を計画する時には、低学年の子も含めてすべての子どもたちがゲーム経験を積めるよう計画をしています。覚えていないルールがあったり、ボールもなかなか思うようにあやつれなかったりしますが、ゲームのなかでルールを覚えていったり、プレーすることですましくいかなかったことを確認したり、うまくできたプレーに喜びを感じて意欲を高めたりします。また、試合をするためのきまりごとや試合会場でのマナーなどを、見よう見まねで学びます。子ども（先輩）から子ども（後輩）に自然に受け継がれていくものが多々あります。

実は、長期化しているコロナ禍のなかで、子ども時代に経験しておかなければならないことを経験できないまま年齢を重ねている子どもたちが多く存在していることを大変危惧しています。もちろん子どもの責任でもなければ、だれの責任でもありません。否応なく、そのような状況になってしまったということです。大事なことは、そのことを、子どもの成長（育ちや学び）にかかわっているおとなは認識しておかなければならないということです。いわゆる空白の数年間を過ごさざるを得なかった子どもたちが自身のなかで、不安、心配、苦悩を抱えている可能性があるということなのです。私たちおとなは、今後の子どもをようすをよくみとって、何かサインを示したら、その認識をもって必要なサポートを行っていくことが重要です。

バスケットのなかだけでも、試合の進め方、オフィシャルのしかたなど、これまでは、年間複数回の大会を重ねて経験するなかで、先輩から後輩へ、見よう見まねで、あたりまえのように継承されていたものが、ほぼできていない、わからなくなっていることに気づかされました。ほぼ0から新たに教え直さなければなりませんでした。

学校教育活動のなかでも、「実施できなかった、運動会、文化祭等の学校行事で、これまで6年生が手本となって、子どもたちどうしで受け継ぎつくりあげていたものが継承されず、途絶えてしまっていて、とても苦労しています」という現場教師の声を聴きます。

また、3年前感染が始まった当初の子どもたちの中には、卒業式も、入学式も、修学旅行も経験できないままの子たちがいます。それに伴う、さまざまな活動もなくなったりと制限されたりして、いろいろな経験が質・量ともに不足したまま、次の進学先に送り出されています。とりわけ、人と接すること、交わることを制限されたことによる、コミュニケーションに関する不安感が、なかなかぬぐいされないということも聴きます。当時、高校生、大学生だった子たちは、授業や講義も、進学や就職の試験・面接も、「リモート」によるものばかりで、実際に人と接する機会がなく、友だちもできづらく、先生との信頼関係も十分築けず、さらなる進学先や就職先で人と接することに抵抗感をもったり、臆病になったりしている人もいます。

人として必要な経験が奪われてしまうことにより、さまざまな不安や心配、苦悩が生じているということです。子ども時代、学生時代に必要な経験、とりわけ人との交わりができないまま、先に進んでいる子どもたちがいるということを、支援するおとなは、認識しておかなければなりません。「そんなことも経験してないのか」ではなく、「経験できなかったんだ」ということをふまえて、支えてあげることが重要です。

